
ミラノデザインウィーク 初出展

平和合金 x we+

鋳物文化の魅力を探究する新作「Unseen Objects」を展示

会期：2025年4月7日（月）～ 4月13日（日）

会場：Galleria Rubin / Via Santa Marta 10

株式会社 平和合金（富山県高岡市）は、イタリア・ミラノで開催されるミラノデザインウィーク2025に初出展し、2025年4月7日（月） - 4月13日（日）の7日間、鋳造文化の魅力を探求する新作「Unseen Objects（アンシーン・オブジェクト）」を、5 VIE（チンクエヴィエ）エリアに位置するGalleria Rubinで展示します。

本作では、コンテンポラリーデザインスタジオ we+をデザイナーに迎え、製造の過程で使用される道具や治具、素材の質感や偶発的な造形など、これまで見過ごされてきた鋳物文化の舞台裏に着目。それらを再解釈し、花瓶コレクション「Unseen Objects」は誕生しました。高度な鋳造技術の本質を作品へと昇華することで、鋳造文化の魅力を伝え、本作を通じて鋳物文化の価値を再発見、再定義することを試みます。



Photo: Nik van der Giesen

開催概要

タイトル： Unseen Objects（日本語表記：アンシーン・オブジェクト）
会期： 2025年4月7日（月） - 13日（日） 10:00 - 19:30
会場： Galleria Rubin（住所／Via Santa Marta 10, Milan [MAP](#)）

主催： 株式会社 平和合金
リサーチ&デザイン： we+

Unseen Objects

富山県高岡市は、江戸時代から400年にわたり、銅器鑄造の中心地として発展してきました。日本国内で唯一、銅器鑄造の伝統的工芸品産地として指定されており、「高岡銅器」の伝統技術は、世代を超えて受け継がれています。その高岡市で1906年に創業した平和合金は、ブロンズ像、モニュメント、宗教美術品などの大型鑄造から、ロストワックス鑄造*による繊細な小型彫刻、アート作品まで、これまでに培ってきた技術力と造形力をいかしたさまざまな鑄造を行ってきました。

本プロジェクトでは、we+が平和合金の鑄物工場を幾度となく訪ね、さまざまな鑄造プロセスを丁寧にリサーチ。工場で日々生まれる「見過ごされてきた魅力」に焦点を当て、「中子」「ゴム型」「砂型」「鑄砂」「バリ」「鉄棒」の6つの作品で構成する花瓶コレクション「Unseen Objects」を制作しました。本展では、作品を通して鑄物文化の価値を再発見、再定義することを試みると同時に、鑄造文化の新たな魅力を伝えていきます。

*ロストワックス鑄造：寸法精度が高く、複雑な形状に適するロウを利用した鑄造方法の一種。

ミラノを拠点にデザイン・キュレーター、作家として活躍するマリア・クリスティーナ・ディデロ（Maria Cristina Didero）は、本作に下記のコメントを寄せています。

完璧さを追い求めるこの時代に、Unseen Objectsは静かに異議を唱えます。本作が目を向けるのは、製造過程における「ミス」や「残余物」です。例えば、鑄型の継ぎ目に生じるバリ、こびりついた砂、補強鉄棒の入り組んだ格子模様など、長らく見過ごされてきたものたち。美とは決して磨き上げられたものだけに宿るわけではありません。ひび割れの中に、残された痕跡の中に、そして手の跡が刻まれた不完全なかたちの中にも、美しさは静かに息づいているのです。そして、この作品の本質は、単なる素材の探求にとどまりません。それは私たち自身についても語りかけます。失敗をどう受け止めるのか、試行錯誤をどう乗り越えていくのか。そこには、ものづくりを超えた、生きることそのものへの問いかけがあるのです。

マリア・クリスティーナ・ディデロ



Photo: Masayuki Hayashi



中子 | Casting Core

鋳物の内部に空洞を作るために使用される砂型（中子）の、柔らかく有機的な形状を作品として生かし、普段は見えない要素に新たな価値を与えます。



ゴム型 | Rubber Mold for Lost Wax Casting

ロストワックス鋳造に使用されるゴム型の機能的形状を精密に再現。実用のなかに宿る美にフォーカスします。



砂型 | Ceramic Mold for Lost Wax Casting

通常の制作工程では、破壊される運命にある砂型を作品として保存。儚くも美しい瞬間を捉えます。



鋳砂 | Sand Residue

鋳造後の仕上げ工程できれいに取り除かれる鋳造砂を意図的に残すことで、金属と鋳造砂が融合した新たな鋳物製品の可能性を提示します。



バリ | Burr

鋳造後の仕上げ工程で通常は取り除かれるバリを意図的に残し、偶発的に生まれる形状を作品として再構築します。



鉄棒 | Iron Rods

大型鋳物の砂型を固定するための鉄棒には、折れ曲がりや溶接痕が随所に見られ、その豊かな表情を作品として昇華しています。

Photo: Nik van der Giesen

関係者プロフィール

we+

<https://weplus.jp>

リサーチと実験に立脚した手法で、新たな視点と価値をかたちにする
コンテンポラリーデザインスタジオ。林登志也と安藤北斗により
2013年に設立。

利便性や合理性が求められる現代社会で、見落とされがちな多様な
価値観を大切にしながら、自然や社会環境との親密な共存関係を
築くオルタナティブなデザインの可能性を探究しています。デザイナー、
エンジニア、リサーチャー、ライターといった多彩なバックグラウンド
を持つメンバーが集い、研究を起点とする自主プロジェクトを国内外で
発表。そこで得られた知見を生かし、R&D、インスタレーション、
ブランディング、プロダクト開発、空間デザイン、アートディレクション
など、さまざまな企業や組織のプロジェクトを手がけています。



FRAME Awards 2024 / Designer of the Year, Set Design of the Year, Best Use of Colour, Wallpaper* Design Awards
2024 / Best Elements of Surprise, Dezeen Awards 2022 / Emerging Design Studio of the Year Public Vote, EDIDA
2019 / Young Designer of the Year Nomineeなど受賞多数。

作品は、ドイツのヴィトラ・デザイン・ミュージアムなどに永久収蔵されています。

平和合金

<https://www.heiwagokin.co.jp>

明治39年（1906年）創業。長年受け継がれてきた伝統技術を駆使し、銅像・モニュメント・神仏具などの
大型铸件から、ロストワックス铸造による繊細な小型彫刻、アート作品まで、幅広い铸造技術を専門としていま
す。原型の製作から铸造、仕上げまで、お客さまの想いやイメージを金属を通してカタチにし、丹精込めてつ
くり上げた作品が、人々に喜びや感動をもたらし、心に残るものとなることを願い、一つひとつの工程に心を
込めて取り組んでいます。伝統技術を守りながらも、卓越した技術力と造形力をいかし、さらなる研鑽を重ね
て革新し続けています。



Photo: Kenichi Murase

<プレスお問合せ先> *ご取材や素材データのご依頼、ご質問などについては下記までお問い合わせください。

HOW INC.

Tel. 03-5414-6405 / Mail. pressrelease@how-pr.co.jp

<読者お問合せ先>

株式会社 平和合金

Tel. 0766-63-5551 / Mail. sales@heiwagokin.co.jp